科学技術コミュニケーション推進事業「未来共創イノベーション活動支援」
平成 30 年度採択企画
「こまつしまリビングラボ」

終了報告書

令和3年5月20日

国立大学法人徳島大学

目　次

1. 概要 …… 1
　1-1. 企画名称 …… 1
　1-2. 提案機関 …… 1
　1-3. 企画担当者 …… 1
　1-4. 企画の実施期間 …… 1
　1-5. 企画概要 …… 1
　1-6. 活動のビジョンとその背景にある問題意識 …… 1
　1-7. 具体的な成果 …… 2
　1-8. 目標 …… 2
　1-8-1. 長期目標 …… 2
　1-8-2. 年度目標 …… 3
　1-9. 実施体制 …… 6
2. 企画の達成状況 …… 7
　2-1. 年度目標の達成状況 …… 7
　2-2. 長期目標の達成状況 …… 8
3. 活動実績 …… 10
　3-1. 平成 30 年度の活動実績 …… 10
　3-2. 平成 31 年度の活動実績 …… 13
　3-1. 令和2年度の活動実績 …… 17
4. ネットワークの状況 …… 19
5. 成果及び波及効果 …… 20
6. 外部評価 …… 24
　6-1. 評価委員の選出基準 …… 24
　6-2. 評価委員 …… 24
　6-3. 評価委員への依頼事項 …… 24
　6-4. 評価検討委員会の開催状況 …… 24
　6-5. 評価委員の現場への立ちあい状況 …… 25
　6-6. 評価のための参考資料の作成 …… 25
　6-7. 最終年度の活動評価 …… 25
7. 支援終了後の活動（継続・発展）など …… 26

1.　概要

1-1. 企画名称

こまつしまリビングラボ

1-2. 提案機関

国立大学法人　徳島大学

1-3. 企画担当者

提案機関業務主担当者：山中英生

提案機関業務副担当者：松本卓也

1-4. 企画の実施期間

平成３０年４月１日～令和３年３月３１日

1-5. 企画概要

徳島県小松島市で進行中の産直市「みはらしの丘あいさい広場」の再開発に合わせて、地産地消のアクションを科学的思考に基づき社会に醸成する『こまつしまリビングラボ』を実装することを目的とする。リビングラボの構造は、市民科学を社会に浸透させるために有用な手段となる。本事業では、年間小松島市人口の 15 倍以上の買い物客が集まるこの産直市を多様なステークホルダーが日常の延長で集まる格好の場と捉え、大学、高校、病院、企業、飲食店、新規就農者、地元農家、JA、行政、買い物客を結びつける共創環境の可能性を検討する中で『こまつしまリビングラボ』の自立・持続的運営ができる体制を構築し、地域の食を通じた健康づくりを目指す。

1-6. 活動のビジョンとその背景にある問題意識

イノベーションを加速する産官学民連携の新しい枠組みとして世界的注目を集める『リビングラボ』を、徳島県の小松島市を中心に実装し、徳島大学が国立大学初の施設として運用するフューチャーセンターA.BA、ならびに、FabLab(メーカースペース)と連動させ、多様なステークホルダーと知識創造、そして、科学技術の積極活用から、未来共創する。

徳島大学から車で 20 分の小松島市は、豊かな自然に囲まれ、一次産業に伝統と実績のある町である。そこには、年間の買い物客が人口の 15 倍を超える産直市「みはらしの丘あいさい広場」がある。一方で、都市との格差に苦しみ、若者の流出、少子高齢化から、人口減、経済の低迷と言った問題を抱える。そこで「こまつしまリビングラボ」では、農と食の課題解決、6 次化産業の推進、拡大をテーマに協業の輪を広げつつ、地方の再生、持続と成長、100 年時代を健康幸福に生き抜くワークライフシフトなど、より大きな社会課題の解決に取り組む。

特に、徳島県は、2007 年から 2013 年まで成人病の一つである糖尿病による死亡率が全国１位であったことから、この現状を踏まえ食生活や医療、運動など多面的な健康づくりへの研究や対策に長年力を注いできた。しかし一方で、これらの取り組みの多くは、互いに連携が行われておらず、知識の共有が伴っていないことから、個々に優れた取り組みを実施しても単発で終わり、地域を持続的に変革するイノベーションが起こりにくい現状がある。また多くの取り組みは、市民に対してトップダウンに提供されており、市民が自発的にプログラムをデザインしたり、高度な研究と共創するといった、参加の多様性

が考慮されていなかった。真に持続可能な健康社会を目指すには、市民の自発的なアクションが最も重要である。

1-7. 具体的な成果

本事業のアウトプットは、社会共創プラットフォームとしてのこまつしまリビングラボの実装を行うことである。

本事業のアウトカムは、参加者に対する成果および地域に対する成果に分けられる。
まず「みはらしの丘あいさい広場」に訪れた人々およびステークホルダーが、本活動における『こまつしまリビングラボ』構築プロセスに参加することによって参加者に対する以下の成果が期待できる:

- 地産地消や食を通した健康づくりに関する科学的知識の醸成
- 知識の共有に基づいた社会に対するアクションの共創
- リビングラボの社会への効果・役割に関する実践的理解と参加意欲の醸成
- リビングラボの自立・持続的運営メンバーへの参画

例えば、「こまつしまリビングラボ」と接することで、産直市へ買い物に訪れる家族が健康で美味しい野菜の調理法に関する知識を得る、新規就農者が新たな農業技術を考えるヒントを得る、農家が自分の農作物の魅力を他者に伝えられるようになる、地元のシェフが地元野菜を使った新メニューをテストしフィードバックをもらう、商品開発者が地元ならではの特徴を生かしたビジネスモデルを考案する、病院や研究者がセルフヘルスケアプログラムを人々に試すきっかけとして活用する、等のアクションが生まれることを想定している。

以上のアクションが実現されることにより、地域に対する成果として以下が期待できる：

- 地産地消や食を通した健康づくりに関する人々のネットワーク創出
- 地産地消や食を通した健康づくりに関する知識の蓄積
- 地産地消や食を通した健康づくりに関するイノベーションの拠点化

1-8. 目標

1-8-1. 長期目標

本活動は、地域内外から数多くの来訪がある日常に浸透した「産直市」という場に着目し、日常の延長にリビングラボという多様な共創を実現する環境を構築することで、県内外で行われている様々な食と健康づくりの取り組みを結びつけ、暮らしの目線に立ったイノベーションを持続的に生み出すことを目指す。この手法は、現在全国的に急速に増えている農をテーマとした市場や体験型パークなど、農環境を活かして地域活性化に取り組もうとする地域においても有効と考えられ、他地域で応用可能な成果として報告書をまとめる。

まず１年目は市民が研究の一環に参加するリビングラボの概念の理解醸成とチームビルディングを行い、こまつしまリビングラボを進める。さらに２年目以降は、研究者の支援を得ながら、地元の高校、病院、企業、飲食店、新規就農者、地元農家、JA、行政、買い物客が６次化商品、レシピ、農園プログ

ラム等を自ら共創していく力をつけるプログラムを開始し、リビングラボの自立・持続的運営体制構築を段階的に行っていく。

1-8-2. 年度目標

［平成 30 年度の年度目標］

①新しい農業力と幸福健康社会の形成のためのグローバルレベルでの基礎調査

達成基準：リビングラボ理解を進める WS の設計・実施

②こまつしまリビングラボ（KLL）のコンセプトと機能/構造/アクティビティのデザイン

達成基準：リビングラボで次年度から実験を行うチームを３組以上発掘

③新しい農業力、食育、ICT 活用、場づくりによる幸福健康社会共創プラットフォーム構想

達成基準：こまつしまリビングラボコンセプトブック or ムービーの制作・配布

［平成 31 年度の年度目標］

①調査研究活動の実施

達成目標：(a)論文発表２本、コンセプトブックの完成(b)小松島（地方縮小都市）型リビングラボに求められる機能を実践から抽出しプログラムとして完成させる

②モニタリングラボの稼働

達成目標：協力研究室１室以上の発掘

③共創ラボの稼働

達成目標：地域以外の分野から新チームを最低１件発掘

④活動チーム育成プログラムの実践

達成目標：(a)新チーム発掘 2 件以上(b)1 チーム以上のテーマで専門家とタイアップしたプロトタイピングプログラムの実施

［令和２年度の年度目標］

①科学的技術とチャレンジのマッチングにフォーカスした社会実験の計画支援体制の構築

これまでの活動で生まれた地域発のチャレンジごとに、運営事務局がコーディネートし研究室や企業や専門家とのマッチングを進め、科学技術を取り入れた社会実験の計画策定支援を行う。

a.研究・教育機関、企業、地域が主体的にリビングラボを活用するマッチングシステムの構築

チャレンジを牽引する市民と、科学技術者・研究者・企業・専門家などとの有用な接点を生み出すマッチングの仕組みづくりを行う。具体的には、チャレンジチームの概要と求める技術や専門知識のシーズをまとめた WEB データベースを構築する。また、事務局が主導し科学技術者や研究者などの専門家が集まるプラットフォームと連携し、チャレンジと専門家のマッチング機会を創出する。

達成目標：マッチング用 WEB データベースの構築、連携パートナーの獲得１件以上

b.社会共創フェスティバルの実施

これまで合宿形式のデザイン・ワークショップとして行ってきた社会共創キャンプを、今年度は一定期間を通して各チャレンジが小松島市を舞台に同時多発的に社会実験を行う社会共創フェスティバルとして位置づけ、地域内でのリビングラボの定着や市民目線を取り入れる場を創出する。地域住民の集まる場所（小松島市役所内、産直市や飲食店など）と連携し、地域住民が社会実験に参加できる仕掛け作りを行う。期間中には社会実験や取り組みを視察、体験できるビジットツアーも合わせて企画し、新たなこまつしまリビングラボの共創活動への参加者、ステークホルダーの発掘を行う。

達成目標：全チャレンジチームで専門家とタイアップしたプロトタイピングの実施、チャレンジとステークホルダーの新規マッチング２件以上

②こまつしまリビングラボの効果検証と地方におけるリビングラボのあり方のモデリング

他地域事例や視察などで得られた知見をもとに、これまでの実践活動を客観的にとりまとめ、効果検証を行う。最終的には他地域でも応用可能な成果報告を作成し、対外発表を行う。

c.社会イノベーションに関する調査研究の実施

運営メンバーを中心に、市民参加型社会形成、幸福健康社会デザイン、新産業創出、社会イノベーションの共創等に関する国内/海外事例の調査研究に取り組むために、Open Living Lab Days 2020（ベルギー開催）に参加し、小松島における実践状況を対外的に発表する機会を設け、専門家との議論を深める。

達成目標：論文・研究報告の発表 2 本

d.成果報告シンポジウムの開催

サイエンスアゴラ、全国リビングラボネットワーク会議、FCAJ などとの連携の中で、小松島市にて「地方の中でのリビングラボのあり方」というテーマでこまつしまリビングラボ 3 年間の取り組みの報告会を開催し、事業のフィードバックと今後のこまつしまリビングラボのあり方について議論を行い、政策のプロトタイピングを行う。

達成目標：シンポジウムの開催

e.KLL の効果検証を行い、結果と成果をまとめたコンセプトブックの発行

これまでのリビングラボへの参加者、運営、ファシリテーターなどで構成される研究チームを結成し、これまでのリビングラボ活動の効果を考察、検証を行った内容をコンセプトブックとしてまとめ、発行する。

達成目標：コンセプトブックの発行、対外発表

③こまつしまリビングラボの社会実装にむけた運営体制の構築

これまでの活動の振り返りと、成果報告シンポジウムでの議論の結果を踏まえて作られた政策をもとに、徳島大学、小松島市、その他ステークホルダーを交えた協議を行い、2021 年度以降のこまつしまリビングラボの運営体制の合意形成を行う。

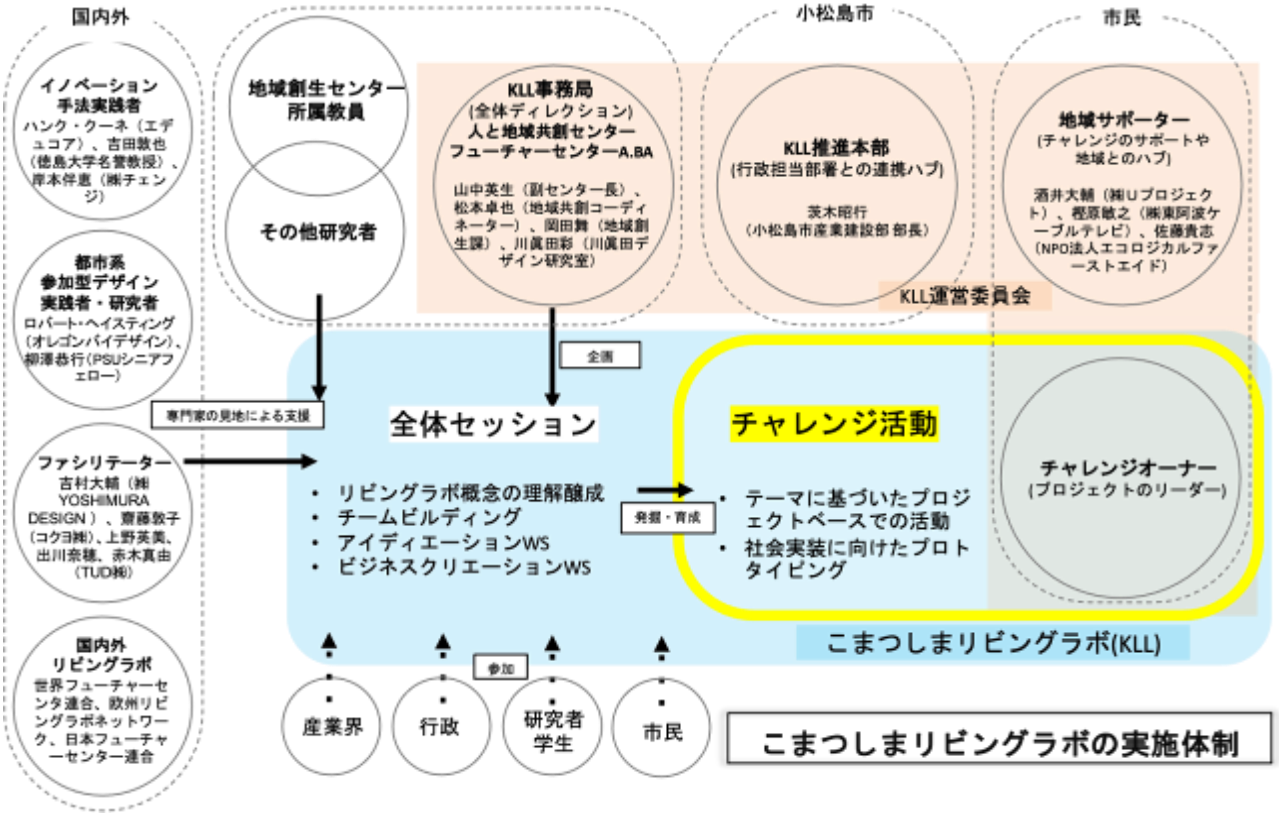
達成目標：2021 年度のこまつしまリビングラボに対する大学・行政・ステークホルダーからの予算化

④外部評価委員会の実施

産官学民から構成される外部評価委員を実施し、本事業の取り組みを複眼的視点で評価をして頂く。

達成目標：外部評価委員会の開催

1-9. 実施体制


国内外
イノベーション手法実践者
ハンク・クーネ（エデュコア）、吉田敦也（徳島大学名誉教授）、岸本伴恵（㈱チェンジ）
都市系参加型デザイン実践者・研究者
ロバート・ヘイスティング（オレゴンバイデザイン）、柳澤恭行（PSUシニアフェロー）
ファシリテーター
吉村大輔（㈱YOSHIMURA DESIGN）、齋藤敦子（コクヨ㈱）、上野英美、出川奈穂、赤木真由（TUD㈱）
国内外リビングラボ
世界フューチャーセンタ連合、欧州リビングラボネットワーク、日本フューチャーセンター連合
地域創生センター所属教員
その他研究者
専門家の見地による支援
小松島市
KLL事務局
(全体ディレクション)
人と地域共創センター
フューチャーセンターA.BA
山中英生（副センター長）、松本卓也（地域共創コーディネーター）、岡田舞（地域創生課）、川眞田彩（川眞田デザイン研究室）
KLL推進本部
(行政担当部署との連携ハブ)
茨木昭行
（小松島市産業建設部 部長）
KLL運営委員会
市民
地域サポーター
(チャレンジのサポートや地域とのハブ)
酒井大輔（㈱Uプロジェクト）、樫原敏之（㈱東阿波ケーブルテレビ）、佐藤貴志（NPO法人エコロジカルファーストエイド）
企画
全体セッション
・ リビングラボ概念の理解醸成
・ チームビルディング
・ アイディエーションWS
・ ビジネスクリエーションWS
発掘・育成
チャレンジ活動
・ テーマに基づいたプロジェクトベースでの活動
・ 社会実装に向けたプロトタイピング
チャレンジオーナー
(プロジェクトのリーダー)
こまつしまリビングラボ(KLL)
参加
産業界
行政
研究者
学生
市民
こまつしまリビングラボの実施体制

2. 企画の達成状況

2-1. 年度目標の達成状況

ここでは、年度ごとに掲げた目標について、1-8-2 で示した達成目標に基づいてその達成状況を以下に記す。

［平成 30 年度の年度目標達成状況］

① 5 月、6 月に実施したキックオフ WS や、8 月、9 月、10 月に実施したデザイン思考を実践的に学ぶぽんぽこ大学院の WS、11 月に実施した 4 日間にわたる社会共創キャンプの開催により十分に達成した。② 自立的に活動を継続する 3 つのチームを発掘することができた。次年度に向けてのプロトタイピングと実験に向けて計画を進めた。③ 事務局、運営委員会、ファシリテーターなどが中心となり全体の活動指針となるコンセプトブックを作成する方針が定められ、製作に向けた議論を開始した。

［令和 1 年度の年度目標達成状況］

①a 論文の作成と発表、コンセプトブックの完成は当初予定よりも遅れが生じたが、今年度中に執筆スケジュールの調整を行い、最終年度の発表に向けて準備を進めた。①b 前年度に実施したプログラムの分析を踏まえて、欧米社会における市民参画型の社会イノベーション創出モデルをその基礎としながら、小松島に最適化したプログラム構築を行うことができた。②a 大学研究室との個別の打ち合わせや学内で行われた研究交流会での事例発表などで連携先を模索したが、２年目時点ではパートナーとなる研究室や研究者とのマッチングまでには至らなかった。③ 社会共創キャンプにおいて小松島市行政から道の駅プロジェクトが持ち込まれた。また、農業チームにおいては小松島と都市部を繋いだ新たな共創の形を生み出すことができた。④a 今年度の活動を通じて、海岸汚染にフォーカスした環境問題チーム、子育て支援・教育改革チームの 2 件を発掘することができた。④b 地域の海岸における水質改善に取り組むチームでは、昨年度水質浄化の専門家 NPO 法人エコロジカルファーストの代表理事佐藤氏がプロジェクトメンバーとして参加し、社会実験に向けたプロトタイピングプログラムの計画を進めた。

［令和 2 年度目標の達成状況］

① ab 令和2年度は新型コロナウィルス感染症拡大の影響を受け、当初予定していた社会共創フェスティバルについては実施することができなかったものの、各チャレンジと科学技術を持った企業や研究者などの専門家の共創によるプロトタイピングの実施を目指し、オンラインベースでの活動を進めた。7 月 11 日に開催したプレセッションでは、地域内外から様々な技術を持った専門家 12 名が参加し、各チャレンジの活動内容の紹介やプロトタイプのアイディエーションを行った。その結果、農業イノベーションを目的としたチームとドローンを活用した農業技術に取り組む企業経営者とのマッチングが実現した。また、災害に強いこども園づくりを目的としたチームでは徳島大学の地域防災専門家とのマッチングが実現し、11 月にはその専門家監修のもと子どもと保護者が楽しく防災を学ぶことのできるワークショップを開発し、専門家とチャレンジが共創したプロトタイピングを実施することができた。②c 9 月に台湾建築学会の大会開催特別講演にて、「地域を共創する-徳島大学・人と

地域共創センターの活動-」の中でこまつしまリビングラボの取り組みについて発表を行った。また、11 月には第 179 回 ヒューマンインタフェース学会研究会にてこまつしまリビングラボを事例とした「地域の共創活動に参画する地域外クリエイターの動機に関する研究」の発表を行った。②d 11 月 29 日に、オンラインとオフライン(小松島市役所)のハイブリッドにて、3 年間の成果を共有するシンポジウムを行った。これまで活動の中心を担ってきた市民、運営委員会や事務局、小松島市行政から市長、副市長も参加し、全体で 41 名の参加者とともに、3 年間の成果を共有した。②e 3 年間の活動をまとめたコンセプトブックを制作し、関係各所に配布した。③ 来年度以降の具体的な予算化はできなかったが、大学、行政、市民それぞれが 3 年間で得たネットワークや知見を活かし、今後の活動を検討した。④ 2 月 24 日に評価委員会を開催した。

2-2. 長期目標の達成状況

ここでは、長期目標として掲げた暮らしの目線に立った持続的なイノベーション創出の目標達成状況を、以下の 5 項目の基準を据えて評価する。

（1）リビングラボの概念の理解醸成　達成　一般参加者を対象としたイベントを 3 年間に渡り 47 回開催し、述べ 1,200 人以上の参加者を得た。また、より広くその概念を伝えるために、活動の報告をその都度 HP、SNS で行なった。初年度に作成したこまつしまリビングラボのコンセプトや活動内容を紹介したパンフレットを用いながら、地域内外におけるリビングラボに対する理解醸成、認知度の向上、定着に努めた。こうした活動の結果、2 年目以降は参加している市民自身が地元のローカルメディアでこまつしまリビングラボの活動紹介を行うなど、参加者自身がリビングラボを解釈し発信するケースも見られ、地域でのリビングラボの概念の理解醸成を十分に行えたと言える。

（2）ステークホルダーのネットワーキング 達成　初年度からフィールドとなる小松島地域を中心に多分野にわたるステークホルダーへのインタビューを実施し、活動の中心となるチャレンジオーナーやメンバーの発掘を行った。3 年間を通じて具体的な活動を行った 7 つのチャレンジが生まれ、現在も４つのチャレンジが積極的に活動を継続している。また、初年度、2 年目と苦慮してきた大学研究者や企業の巻き込みに関しても、オンライン活動がベースとなった 3 年目には地域外からの参加を募ることが容易となり、各チャレンジとのマッチングが進んだ。社会情勢的に地域をフィールドとした具体的なプロトタイピングまでは至らなかったものの、今後も継続して共創活動を行う専門的な科学技術を持ったステークホルダーを獲得することができたと言える。その他、事務局や運営委員会のメンバーを中心に、先端的なイノベーション拠点への視察や国際会議に参加し、国内外のリビングラボや類似組織とのネットワーキングを行った。

（3）小松島で機能するリビングラボのプロトタイピング　達成　3 年間の活動を通じて、社会課題の抽出時、チームの立ち上げ時、社会実験の計画時など、参加者の中心となる小松島市住民に理解しやすい WS のデザイン、用いる資料の作成などを行った。最終的には、これまでの参加者やチャレンジオーナーからのフィードバックを得て、リビングラボのプロセスを、チャレンジを生み出す醸成フェーズと、個々のチャレンジを支援するテストベッドフェーズに整理し、運営体制のモデル化を行うことができた。一方で拠点となる場に関しては、当初計画時では JA 東とくしまが運営するみはらしの丘あいさい広場が最有力であった。しかし、取り組みを進めるうちにその活動範囲は産直市を核とした

６次化産業イノベーションの文脈にとどまらず、活動テーマも多様化した。そこで 2 年目以降は物理的な拠点形成という観点に囚われることになく、最適な形で最適な機能をデザインするという方針変更を行った。徳島大学のフューチャーセンターA.BA を中心に、小松島市役所や地域のお寺や海岸の倉庫など、結果的にこの方針は地域内外の場の価値の再発見にも繋がった。

（4）リビングラボの自立・持続的運営体制の形成 おおむね達成　最終的には当初想定していた政策形成や行政による担当部署の設立、具体的な予算化には至らなかった。しかし、徳島大学、小松島市役所、チャレンジオーナーを中心とした市民などの主要な関係者が主体となり、こまつしまリビングラボに取り組む中で得た知識やネットワークを活用しながら以下の活動が発展的に生まれている。まず、事務局として全体ディレクションを担ってきた徳島大学の人と地域共創センターでは、これまで実践してきた共創の手法を教育の中に取り入れる。具体的には、徳島大学が文科省より受託した大学教育再生戦略推進費「大学による地方創生人材教育プログラム構築事業」の中で進める地域の課題解決を目的とした地域共創型インターンシップ（仮）の開発に取り組んでいく。小松島市役所では、行政での短期的な予算化ではなく共創活動の重要性を理解した職員育成が長期的なプラットフォームの構築につながるのではという評価委員会からの助言もあり、市役所の若手職員、地域にある企業の若手社員、徳島大学生が参加してリビングラボを実践的に学ぶ共創型人材育成研修を 3 年目に実施した。本取り組みは、小松島市役所を中心に来年度以降も継続して行っていく予定である。現在活動中の 4 つのチャレンジも、当面は徳島大学が支援しながら、自立に向けて地域での共創活動を行っていく。

（5）他地域で応用可能な成果報告書の作成 達成 これまでの活動を運営委員会内で振り返り、他地域での共創活動のヒントとなる成果報告書（コンセプトブック）を作成、発表した。コンセプトブックは印刷終了後、関係各所への配布を行った。

3. 活動実績

3 カ年における活動実績を、以下時系列に記す。

3-1. 平成 30 年度の活動実績

活動名：プレフォーラム　対話型デザイン WS1「地域のスクラムづくり」
日時：2018 年 5 月 29 日（火）　14：00～17：00
場所：みはらしの丘（旧）あいさい広場
活動内容：「市民が主役の未来づくり」をテーマに第 1 回ワーキングを開催し、77 名の参加者が、産直市が移転し空き空間となった会場に集った。吉田敦也教授と 小松島市長からの挨拶の後、地域のスクラムづくりを目指し、民学産官から 7 名の話者が壇上に上がり「わたしと小松島」と題してピッチトークを行った。さらに、関心を持ったテーマでテーブルに分かれ、小松島に潜むポテンシャルを発掘するワークショップを行いました。最後に各テーブルで生まれたアイディアを即興劇として披露することで、リビングラボの重要な特徴である、「アイディアを共創し形にする」プロセスを参加者全員で体験し共有した。

活動名：キックオフフォーラム　対話型デザイン WS2「キックオフミーティング」
日時：2018 年 6 月 14 日（木）　13：30～17：00
場所：みはらしの丘（旧）あいさい広場
活動内容：　「小松島にいまある資源を再発見」をテーマにこまつしまリビングラボのキックオフミーティングを開催した。地域内外から多世代・多業種の参加者が集い、会場は 81 名もの人々の熱気に包まれた。会場は、前回からの視点場の変化を生み出すため、産直市の移転で生まれた空き空間に、今、そこにある青果場ならではの資源を使って桟敷席をつくった。「リビングラボの有用性と世界的動向」をテーマに、鎌倉リビングラボに取り組まれている秋山弘子特任教授（東京大学高齢社会総合研究機構）とリビングラボの先進地であるスウェーデンで活動されているマチルダ・タム教授（リネアス大学デザイン学科）から講演いただいた後、6 つの小松島の資源をテーマにテーブルに分かれ、資源の魅力を引き出すためのアイディアとそれを実現することで生まれる小松島市の未来を描くワークショップを行った。

活動名：ぽんぽこ大学院 今必要な小松島の未来「形にしてみよう祭」
日時：2018 年 8 月 4 日(土)10:00～17:00 - 8 月 5 日(日)10:00～16:00
場所：小松島市みなと交流センターkocolo
活動内容：これまで実施してきたチームビルディングやキックオフイベントから立ち上がった、地域の変革を進める「プロジェクトチーム」。その一つ「就農と移住を誘う街のデザイン」の活動を取り上げ、科学的な共創プロセスに基づき一般参加者と共にチームの活動を育てる 2 日間のワークショップを実施した。延べ 26 名の参加者と共に、ステークホルダーとペルソナの概念を学び、3 グループに分かれ出てきたアイディアについて市内の農業関係者や行政にヒアリング調査を行い、実社会のニーズに合う形に

落とし込む体験を行った。有機農業を学べる農泊やトラクター競走など最終的に生まれたアイディアのいくつかは、地域のつながりの中で実現可能なものであり、今後プロジェクトチームが参加者を巻き込みながら地域での実装を行っていく上で意義深いセッションとなった。

活動名：ぽんぽこ大学院 今必要な小松島の未来「ためしてみよう祭」
日時： 2018 年 9 月 8 日(土)10:00～17:00 - 9 月 9 日(日)10:00～17:00
場所：徳島小松島港県営 2 号上屋
活動内容： こまつしまリビングラボのプロジェクトチームを応援するプログラムぽんぽこ大学院の 2 回目は港の倉庫を舞台に実施した。テーマは「人と人がつながる場づくり」。小松島西高校の生徒 2 名が発起人となり、地域の課題や困り事に共に取り組む仲間とつながるためにはどんな仕組みがあるとよいか参加者全員で考えるプログラムとなった。今回は「インサイト」について学びを深め、普段ふれあうことの少ない「高校生・大学生」と「大人」がどのようなつながりを求めているかを、若者と大人のチームに分かれて多面的に引き出す作業を行った。その後、若者と大人混合のグループを作り、「つながる仕掛け」をその場でプロトタイピングし、参加者が実際に体験して感想を言い合うセッションを行った。悩みのタイプ別有機野菜のスムージーカフェや列車の車両に図書室やコミュニティスペースを設ける案など多様なアイディアが生まれ、さらにそれらをその場で試すことで、本当に人とのつながりが生まれるか即座に確かめていくことの重要さを体感する回となった。

活動名：ぽんぽこ大学院 今必要な小松島の未来「深めてみよう祭」
日時： 2018 年 10 月 6 日(土)13:00～17:00 - 10 月 7 日(日)10:00～17:00
場所：小松島市総合福祉センター
活動内容：こまつしまリビングラボのプロジェクトチームを応援するプログラムぽんぽこ大学院の 3 回目は「港を玄関口とした地域経済の再活性化」をテーマに、毎年やってくる大型クルーズ観光船の乗客に小松島を楽しんでもらうアイディアを参加者と考えた。今回はニーズ調査の代表的手法である街頭アンケートの効果を学ぶことを主眼として、10 月 7 日に寄港するクルーズ船の乗客のニーズを Web アンケートで収集しリアルタイムに結果を閲覧した上で、アイディアを改善するワークを行った。参加者から小松島を楽しむ 50 ものアイディアが出された後、実現したいアイディアについて投票を行い、6 つのチームに分かれてツアーのデザインを行ったが、7 日に訪れた客層や彼らの行動を間近で観察し、またアンケート結果を振り返ってみると、参加者は、ニーズに合っていないアイディアや見込みのあるアイディアを分析的に議論できるようになっていた。市民が自らのアイディアを洗練する技能を高める取り組みとなった。

活動名：平成 30 年度徳島大学タウンミーティング『こまつしまリビングラボ（KLL） 「社会共創キャンプ 2018」』
日時：2018 年 11 月 12 日（月）～15 日（木）各終日
場所：小松島市役所（12 日 13 日）、小松島市総合福祉センター（14 日）、徳島大学フューチャーセンターA.BA（アバ） （15 日）
活動概要：「社会共創キャンプ 2018」は、2018 年 4 月より、産官学民で進めてきた KLL の取り組みを、

全国、世界から集まる方々と共有し、それを土台に「日本の地方の社会イノベーション」の引き金を引くための方法論を学び、社会共創のアクションを起こす4日間のプログラムとなった。フィンランドのアールト大学で開発されたイノベーションキャンプ(ACSI)のプロセスを小松島市に合わせてリデザインし、ACSI提唱者であるEducore代表のハンク・クーネ氏をオランダからお呼びし全体のディレクションを務めていただいた。地域で活動をスタートした6チームの発表を踏まえて、述べ169名の方々が各チームの活動を社会イノベーションに繋げるための再構成の取組に参加することとなった。米国オレゴン州ポートランドからお呼びしたTriMetのロバート・ヘイスティング氏をはじめとするゲストはまちづくりやイノベーションの専門家であり、各チームに新たな視点を提供する役割を果たした。4日間のキャンプを終えて、農業移住支援、水の浄化、クルーズ船観光等の特化したテーマで取り組むチームの活動が活性化した。

活動名：第2回全国リビングラボネットワーク会議
日時：2019年3月15日（金）14：00～17：00
場所：KOTOWA鎌倉、鶴ケ丘会館
活動概要：鎌倉市で行われた第2回全国リビングラボネットワーク会議に参加した。本会議は、全国のリビングラボに従事する関係者が一堂に会し、交流とネットワーキングを行いながら、日本版リビングラボの確立や活動の質を高める検討を進めることを目的としている。東京大学高齢社会総合研究機構、一般社団法人高齢社会共創センターが主催し、日本全国と韓国から大学、自治体、産業界、マスコミ関係者を含む参加者約100名が集まった。パネルディスカッションでは、徳島大学地域創生センター吉田敦也教授がパネリストとして登壇し、こまつしまリビングラボの1年間の活動と成果を発表した。他の登壇者は企業を中心としたリビングラボだったことから、こまつしまリビングラボの特徴である、地域中心の協働の形に興味を示した参加者も多く、実りのある対談を行うことができた。また、ポスターセッションに参加し、こまつしまリビングラボの概念、産官学民のメンバー構成、強み・特長を表したポスターを通じて、全国各地の実践者と運営に関する議論を行うことができた。さらに、鎌倉リビングラボ視察ツアーに参加し、鎌倉リビングラボが実際どの様に運営されているか、運営組織であるNPO法人が何故設立されたか等の説明を現地で聞くことができた。他のリビングラボの活動を目と肌で感じ、他のリビングラボやリビングラボ設立希望者などと繋がることができ、「こまつしまリビングラボ」のこれからの活動を活性化する刺激になった。

3-2. 平成 31 年度の活動実績

活動名：こまつしまリビングラボ 2019 キックオフ「20 分圏内のまちづくり」
日時：2019 年 6 月 29 日(土) 13:30～17:00
場所：立江寺
活動概要：こまつしまリビングラボ 2019 キックオフとして、幸せな街を形作る市民参加について専門家を通して学び、自分たちの街を変えるための活動デザイン・ワークショップを実施した。昨年のリビングラボ活動報告の後、北欧研究所の安岡美佳氏が北欧の幸福な暮らしに繋がる市民の自発的行動／活動の事例を踏まえて特徴を考察し、次に岡山大学地域総合研究センターの岩淵泰助教が米国オレゴン州ポートランドの行政と住民のまちづくりにおける共創的関係性が構築された歴史的背景を解説した。これらのインプットを元に後半、参加者が大きな地図を囲んで小松島のポテンシャルや資源を巡るツアーを行い、今取り組んでいるお互いの活動を共有した。最後には、小松島が 10 年後にあってほしいイメージと、地図に貼られた小松島のポテンシャルや資源と掛け合わせて、小松島にどんな活動で変化を起こすかのアイディア出しを行ったところ、15 の生き生きとしたアイディアの種が参加者の中から生まれた。ここで生まれたアイディアは今年のリビングラボの「チャレンジ」として 1 年かけて育てていく候補になった。

活動名：キックオフ DAY2 アイディアブラッシュアップ DAY
日時：2019 年 6 月 30 日(日) 13:00～16:00
場所：徳島大学フューチャーセンターA.BA(アバ)
活動概要：こまつしまリビングラボ 2019 キックオフ 2 日目として、株式会社富士通エフサスでイノベーションファシリテーターとして活躍されておられる岸本伴恵氏を迎え、視覚会議という手法を用いてキックオフ 1 日目で出てきた 15 のアイディアの種を参加者全員で磨き、アイディアの質を高めるワークショップを行なった。アイディアを磨く中で、科学技術の接点を見つけるために様々なテクノロジーを分かりやすい言葉と絵にしてカード化したものを広げ、参考にしながら参加者にアイディアを記述してもらったところ、8 件のアイディアがブラッシュアップされたが、そのすべてでテクノロジーとの接点が書かれる結果となった。この記述を元に今後、アイディアの社会実験・実装に関わることのできる研究者や企業をこまつしまリビングラボ事務局で探しマッチングを目指した。

活動名：ポートランド研修参加
日時：2019 年 8 月 4 日(日)～8 月 9 日（金）終日
場所：オレゴン州ポートランド
活動概要：こまつしまリビングラボの将来を担う人材を育てるため、昨年のチャレンジオーナーやファシリテーター、事務局に対して希望者を募り、3 名で 2019 年 8 月 4 日(日)～8 月 9 日の 7 日間、ポートランド州立大学主催の『まちづくり人材育成プログラム』＋『クリエイティブ・ビジネス・ワークショップ』への研修参加を行った。プログラムは、ポートランドのまちを知るため「市内探索」に始まり、レクチャー・センッション、そして、ポートランドのまちづくりに関わっている方々の見解や意見を聞く「サイトビジット」により構成されており、座学での体系化した知識の習得と実際の体験を通した学

びを得ることができた。ポートランドのまちづくりの中でキーワードとして出てきた、公正性を持って開かれた組織・運営体制を創ること、市民も行政も一丸となって取り組める問いをデザインすることなど、今後のこまつしまリビングラボの活動において活かしていくことのできるアイディアを得ることができた重要な機会となった。

活動名：ポートランド研修報告会＆「じもととしごと」ワークショップ
日時：2019 年 9 月 25 日（水）17:00～18:00 報告会、18:00～19:30 ワークショップ、
場所：徳島大学フューチャーセンターA.B
活動概要：こまつしまリビングラボを代表して参加したポートランド研修について、報告会を行った。研修を通して得た経験や知識を、今後どのようにこまつしまリビングラボの活動に活かしていくのかについて報告を行った。報告会に続き、「じもととしごと」という地元愛を持ったスキルワーカー達(地元出身者)と、地元を繋げる WEB サービスを題材に、今年のチャレンジが現在抱える悩みや解決したい課題を考えるというワークショップを行った。

活動名：RESAS データで小松島を発見ワークショップ
日時：2019 年 9 月 26 日（木）17:00～19:00
場所：徳島大学フューチャーセンターA.BA
活動概要： 内閣府まち・ひと・しごと創生本部が設けた地域経済分析システム RESAS（リーサス）は、客観的なデータに基づき地域の現状や課題をだれでも把握・分析することのできるオンラインプラットフォームである。前半は、徳島大学“人と地域共創センター”笹尾知世助教による講義を通して RESAS の基本的な使い方やグラフの読み方、グラフの共有の仕方を学び、後半には、小松島市のサマリーデータを使い、具体的に街のどんな様相が見えてくるのか、グラフを観察して発見を共有するミニワークショップを実施した。RESAS の使い方を学びたいという徳島県立城ノ内中学校高等学校の生徒さんにもご参加いただき、6 名で学びを深めた。各自ここで得られた発見を持ち帰り、RESAS を使ってさらに深く調べ、社会共創キャンプにエントリーする 5 つのチャレンジに関連するエビデンスをまとめた冊子を制作し、当日その内容を発表することが決まった。

活動名：社会共創プレ・キャンプ in 横浜「なぜポートランドは走り続けられるのか？」
日時：2019 年 10 月 9 日（水）19:00～21:00
場所：富士通エフサスみなとみらいイノベーション＆フューチャーセンター
活動概要：ハンク・クーネ氏とロバート・ヘイスティング氏、そしてアメリカ・オレゴン州登録建築家の柳澤氏のお三方による「なぜポートランドは走り続けられるのか？」と題したワークショップを横浜で開催した。本会ではこまつしまリビングラボのファシリテーター育成も兼ねており、こまつしまリビングラボ共創キャンプ 2019 のチャレンジの一つ「酒蔵ホテル」を題材に、参加者同士がファシリテーションを実践しながらポートランド風の未来のリビングラボファシリテーターの手法について学び合った。

活動名：社会共創キャンプ 2019
日時：2019 年 10 月 13 日（日）・14 日(月）9:00～18:00
場所：徳島大学フューチャーセンターA.BA(アバ)
活動概要： 昨年度のキャンプに引き続き、オランダからお招きした Educore 創始者／代表でフューチャーセンターアライアンス（FCA）の共同設立者のハンク・クーネ氏が持つ「イノベーションキャンプメソドロジー」をベースとして、米国オレゴン州のポートランドの公共交通（TriMet）のデザインに長年携わり、近年では「Oregon by Design」というボランティア団体を立ち上げ、市民主体のまちづくりに取り組まれているロバート・ヘイスティング氏による「strategic doing」という手法をかけ合わせて、市民、行政、大学、企業が一同に集い、徳島、小松島市発の社会イノベーションを共に創りだす 2 日間となった。

活動名：こまつしまリビングラボ 2019 中間報告会（兼社会実験準備会）
日時：2019 年 11 月 17 日（日）10:00～11:30
場所：小松島市地蔵寺寶珠院
活動概要：中間報告会では、事務局から社会共創キャンプの振り返り、そして今後、各チャレンジで行う社会実験の進め方に関して、説明を行った。その後、各チャレンジオーナーからキャンプ後、1 ヶ月でどのような活動をしたのか、また今後の社会実験の実施計画について報告、共有を行った。

活動名：ANA アバターで瞬間移動を体験しよう in 小松島
日時：2019 年 11 月 17 日（日）11:30～13:30
場所：小松島市地蔵寺寶珠院
活動概要：こまつしまリビングラボの中間報告会と合わせて、ANA ホールディングスが取り組む「ANA アバタープロジェクト」の体験会を開催し、小松島市民や徳島大学学生をはじめとする 12 名が参加した。新しい技術を社会にどのように結びつけて取り入れていくかというテーマに対して、参加者に多くの学びと活動への示唆を得ることができた。

活動名：お宝探しだよ全員集合！！「シークラフトワークショップ in 横須海岸」
日時：2019 年 12 月 22 日（日）10:00～12:00
場所：横須海岸（徳島県小松島市金磯町）
活動概要：賑わいのなくなった横須海岸にどのようにして人を集めることができるのか、また市民の意識をどのように海岸に向けることができるのかという社会実験として、「横須の海岸をきらきら海岸に」チームが企画したワークショップを開催した。当日は 14 名の市民や徳島大学学生とともに、砂浜探索やプラスチックゴミの回収、砂浜で拾ったモノを用いたシークラフトワークショップを通じて横須海岸の現状をしってもらい、環境意識の向上を図った。

活動名：レンタサイクル実証実験
日時：2020 年 1 月 14 日（火）～2 月 16 日（日）
場所：JR 南小松島駅・駅舎内観光案内所
活動概要：地域初の各種チャレンジを支援する活動育成プログラムのチャレンジのひとつとして、小松島をフィールドにバイクフレンドリーなまちづくりを目指す「サイクルシティ小松島」チームによる、レンタサイクルの実証実験を行った。地域の観光資源の発掘やツアーの実施を行う NPO 法人 小松島市観光ボランティアガイド協力会の協力のもと、小松島地域の主要駅である南小松島駅にレンタサイクルを試験的に設置し、ユーザの需要やサービスを社会イノベーションに繋げるべく、ニーズ調査を行った。

活動名：カレープロジェクトでつながろう WS
日時：2020 年 1 月 25 日（土）9:00～13:00
場所：みはらしの丘あいさい広場アグリカルチャーセンター（徳島県小松島市立江町炭屋ケ谷 47-3）
活動概要：「やまももこども園 PJ」チームが企画した「カレープロジェクトでつながろう WS」を開催した。今回のワークショップは週末の子育て支援プログラムのプロトタイピングとして、また、参加者となる子どもや保護者のニーズ、その効果を調査・検証する社会実験として行った。子ども 16 名、保護者 16 名が参加し、子どもたちが実際に材料を考え、産直市で材料の調達を行うことで、小松島地域の食の豊かさや魅力に触れるきっかけにもなった。また、調理後食事をしながら交流する機会を設け、小松島地域における食の豊かさや、子育て、教育環境に関して、多くの方々と意見交換を行うことができた。

活動名：こまつしまリビングラボ 2019「活動報告会」
日時：2020 年 2 月 16 日（日）14:00～17:00
場所：立江寺
活動概要：キックオフも開催した立江寺にて、チャレンジオーナーをはじめ 34 人の市民や関係者が集まり、こまつしまリビングラボ 2019「活動報告会」を開催した。報告会ではまず、今年度１年を通じて活動した４つのチャレンジオーナーから社会実験の報告、そこから得た学びの共有を行った。その後、チャレンジごとにグループに分かれてアイディアブラッシュアップのためのワークショップを実施し、どうしても囚われがちな常識や当たり前から自由になり、イノベーティブな発想を行う方法を学んだ。今回のワークショップを通じてでたアイディアをもとに、プロジェクトの来年度のプロトタイピングを考えるきっかけとなる、未来に繋がる 2019 年度のまとめの場となった。

3-3. 令和2年度の活動実績

活動名：こまつしまリビングラボ 2020 プレセッション
日時：2020 年 7 月 11 日（土） 14:00～17:00
場所：オンライン開催
活動概要：2020 年のこまつしまリビングラボのスタートとなる全体セッションは新型コロナウィルス感染症が拡大する社会状況を踏まえて、オンラインでの開催となった。今年度のテーマは「チャレンジとクリエイターとの融合」をテーマに、これまで市民が主体となって進めてきた各チャレンジのプロトタイピングを深化&進化させて、社会実装に繋げていくためにチャレンジの支援を進めていくことに取り組んだ。プレセッションでは、共創活動を実践的に展開している NPO 法人ミラツクの森雅貴さんのゲストトークに加えて、事務局、ファシリテーターを中心に集めた 12 名の専門家たちに対して各チャレンジが自分たちのこれまでの活動や今後の計画のプレゼンテーションを行った。自分たちのチャレンジが創りたい未来と、これまでの活動を発表した後は、グループに分かれて専門家とチャレンジがコラボレーションすることでどんなプロトタイピングができるか、アイディアのディスカッションを行った。

活動名：こまつしまリビングラボ 2020 キックオフ
日時：2020 年 8 月 30 日（土）14:00～17:00
場所：オンライン開催
活動概要： こまつしまリビングラボキックオフは、社会情勢を踏まえて前回に引き続きオンラインでの開催となった。各チャレンジがマッチングした専門家とともにプレセッション後に行った活動内容を共有した上で、参加者同士がチャレンジの枠を越えて混ざり合う、チャレンジ間ラウンドテーブルを行った。混ざり合うことで普段活動するメンバーだけでは生まれない視点からのアイディアをたくさんもらった。今後の自分たちの活動に活かせるヒントを他のチャレンジの話を聞くことができ、新たな気付きを得ることができた。その後各チャレンジは、次回 11 月開催のシンポジウムでの活動発表に向けて、プロトタイピングの準備を進めた。

活動名：小松島市共創型人材育成研修『こまつな』
日時：2020 年 10 月 16 日、11 月 6 日、11 月 27 日、12 月 23 日、2021 年 1 月 22 日、2 月 19 日、3 月 18 日 13:00～17:00
場所：小松島市役所、徳島大学フューチャーセンターA.BA
活動概要：小松島市の若手市役所職員、地元の企業や団体の社員・職員、徳島大学生を対象とし、小松島市の遊休資源の活用をテーマに、リビングラボの手法を用いながらその解決策となるアイディアを作っていく中で実践的なスキル、考え方を身につける共創型人材育成研修プログラムを実施した。本活動は、小松島地域で長期的にリビングラボ、共創活動を継続していくためには、広く共創活動の価値を理解する職員の育成が課題であるという問題意識から行った。小松島市役所若手職員 22 名、企業や団体の社員・職員 6 名、そして徳島大学生 7 名の計 35 名が参加した。

活動名：地域共創ファシリテーター養成講座
日時：2020 年 10 月 17 日（土）13:00〜17:00
場所：オンライン
活動概要：本研修では、コミュニティの未来デザインや問題発見のためのフューチャーセッションを企画、実施、運営するスキルを学び、地域の未来を共創できるファシリテーターの育成を目的に開催した。こまつしまリビングラボで中心的に活動するメンバーを中心に、合計 8 名の参加者とともに、チャレンジを具体例としながら実践的にファシリテーションについて学んだ。

活動名：サイクリングコース試走会
日時：2020 年 11 月 8 日（日）13:00〜17:00
場所：小松島市
活動概要：本イベントは、小松島を自転車にやさしいまちにすることを目的としたサイクルシティコマツシマチャレンジのプロトタイピングとして実施した。小松島の観光名所やおすすめのスポットを約 1 時間程度でめぐることができるコースを選定したため、 試走会を実施した。当日は徳島県内でレンタルサイクルを手掛ける「YETI&LTB レンタルサイクル徳島」の大杉氏にアドバイスを頂きながら、JR 南小松島駅を出発して金長神社やしおかぜ公園、港、横須海岸などを巡るコースの試走を行った。約 2 時間程度の試走を終えて出発地点である JR 南小松島駅に戻ってきてからは、近くのカフェに移動して感想をヒアリングした。本プロトタイピングには自転車を中心とした交通政策や都市政策に関する研究をしている大学生も参加し、今後に生かせる有益なアドバイスを得ることができた。

活動名：「お陽様と海岸と珈琲」
日時：2020 年 11 月 14 日（日）10:00〜16:00
場所：横須海岸（徳島県小松島市金磯町）
活動概要：本イベントは、海岸の賑わい、環境改善に取り組むキラキラ海岸チャレンジのプロトタイピングとして実施した。海岸に実際に集まってもらい、どんな使い方ができるのかを一緒に考えてもらうことを目的とした。当日は海岸に集まった 29 人へのアンケート調査も行い、今後のプロトタイピングにつながるアイディアを得ることができた。

活動名：おうち減災ワークショップ
日時：2020 年 11 月 28 日（土）10:00〜14:00
場所：オンライン＆櫛渕公民館でのハイブリッド開催
活動概要：本イベントは、災害に強い地域一体型のこども園づくりに取り組むやまももこども園プロジェクトのプロトタイピングとして、未就学児〜小学校低学年の子どもを持つ保護者を対象として実施した。徳島大学人と地域共創センターで地域防災を専門とする井若研究員や地域の防災活動を実践するラジオとくしま防災委員会などの専門家とともに、ゲームなどを交えながら親子で楽しく防災について学べるプログラムの開発を行った。

活動名：こまつしまリビングラボシンポジウム 2020-地方都市におけるリビングラボの可能性-
日時：2020 年 11 月 29 日（日）14:00～17:00
場所：オンライン＆小松島市役所のハイブリッド開催
活動概要：本イベントは、こまつしまリビングラボの 3 年間を振り返りながら、KLL が地域にもたらした価値を考えながら、活動を振り返り、その可能性はもちろん、生まれてきた課題の両面含めて、参加者とともに共有し、次のステージへと繋げていくことを目的として開催した。オンライン、オフラインを併用したハイブリッド環境で実施し、計 41 名の参加者とともに、リビングラボが地域にもたらした価値を振り返りながら、今後の可能性について対話を行った。

4. ネットワークの状況

本事業開始当初の参加機関数(個人も含む)は、12 であったが、最終的に述べ 30 の参加機関の参画を得ることができた。また立地的視点から分類した参加機関の内訳は、小松島市内が 12、その他徳島県内が 8、県外が 7、海外が 3 となった。小松島はもちろんだが、県内外、国外まで多様で幅広いネットワークを得ることができた。

こまつしまリビングラボが実施した参加型イベントでは、3 カ年を通じて、延べ 1,200 人以上もの参加者を巻き込み、産・官・学・民での共創活動を行うことができた。2 年目の最初のイベントとなったキックオフ、3 年目の最初のイベントとなったプレセッションでは、どちらも約 4 割の新規参加者があり、主要な活動メンバーは定着をしながらも、新たな参加者を巻き込みながら活動を行うことができた。

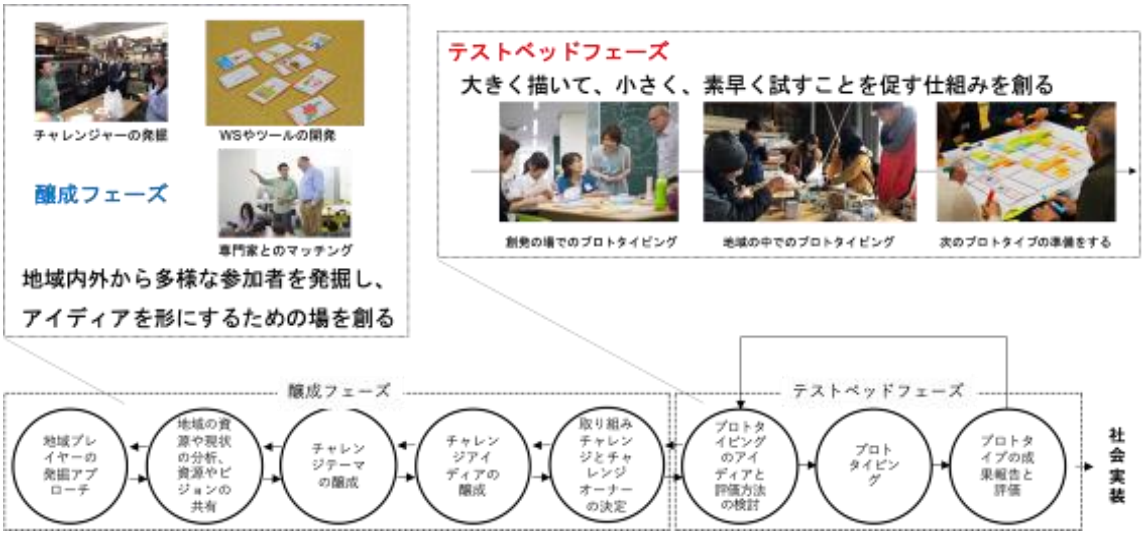
その他、1 年目の参加者が自身の取り組んでいたチャレンジ終了後も、他のチャレンジを支える存在として活動を行った。2 年目に生まれた 2 チームのチャレンジオーナーのように、昨年度の参加者が地域内の人材を発掘し、こまつしまリビングラボでの活動を推薦する事例も生まれた。また、各チャレンジオーナーや地域のキーパーソンで構成されるこまつしまリビングラボ運営委員会では、個別のチャレンジ活動だけでなくこまつしまリビングラボ全体の方向性について話合うことで、地域で様々な市民活動を行うプレイヤーたちの横のつながりを生み出すことができた。

5. 成果及び波及効果

本事業の最大の目的は「社会共創プラットフォームとしてのこまつしまリビングラボの実装を行うこと」であった。当初は産直市を核とした食と健康に特化していたが、本事業を進める中でまちの本質的な課題を多様なステークホルダーとともにボトムアップに抽出したところ、こまつしまリビングラボを核に農業、教育・子育て、林業、自転車による交通改革・健康づくり、河川や海岸などの水質環境の改善など、地域の持続可能性をテーマに様々な課題に取り組む活動チームが生まれた。そうした状況の中各活動チームを支える上でリビングラボの拠点も産直市だけに留まらず、それを取り巻く街全体を含めて、最適な場所に最適な機能をデザインする方針が形作られ、その実装に向けて事業を進めた。最終的に具体的な政策形成や資金獲得はならなかったが、市民が主体的に取り組むチャレンジ活動や地域でそうした活動を支える人材とのつながり、また行政との関係構築など、地域で活動する様々なアクター同士の有機的なネットワークを構築することができたのは最大の成果であると言える。以下、成果及び波及効果について記す。

成果①地方都市で機能する活動モデルの構築

3 年間のリビングラボ実践を通じて、小松島地域に最適な活動モデルを構築することができた。また、既にリビングラボから独立し自主的に活動しているチャレンジもあり、以下に示す活動モデルを作成し、継続チャレンジ、新規チャレンジがスムーズに活動できる基盤を整えた。初年度は社会共創キャンプ後活発に活動できるチームと活動が停滞してしまったチームがあったが、2 年目以降はそうした反省やチャレンジで活動する参加者からのフィードバックを受け、新型コロナウィルスの影響でプロトタイピングを中止せざるを得なかったチャレンジを除き、全てのチャレンジで継続して活動し、プロトタイピングを繰り返すというプロセスを回すことができた。また、地方都市で不足しがちな科学技術や最新の技術を持つ専門家とのマッチングが進まないという課題も、3 年目にオンラインベースで活動することで地域外からそうした専門家の参加を容易にすることができ、複数のチャレンジでマッチングを行うことができた。事務局として 3 年間全体ディレクションを担ってきた徳島大学では、各チャレンジのフェーズごとに必要なデザイン WS のプログラムノウハウや、それに用いるワークシートやツールの開発を行い、運営体制の基盤構築に繋がった。今後小松島市だけでなく、県内他地域や広域連携による共創活動の展開が見込まれる。



成果②持続可能な地域社会を作り出す７つのチャレンジの誕生

3 年間の活動の中で、当初想定していた地域の食を通じた健康づくりという枠組みに留まらず、地域の様々な課題に取り組むアイディアが生まれた。その中でも、チャレンジ活動となり具体的な取り組みに繋がった 7 つのチャレンジをこまつしまリビングラボの成果として、ここで紹介する。

［2018 年～2019 年に活動したチャレンジ］

チャレンジ活動名：新発想!!スマート循環型社会こまつしま
活動テーマ：河川の水質浄化
活動概要：小松島市は美しい田畑や森林の自然環境に囲まれながらも、下水道の普及率が 0%であり、市内の小さな川の多くは悪臭と害虫が発生するという深刻な汚濁状況である。こうした問題意識のもと、地域の高校生たちの「日本に誇れる美しい川の街」を取り戻したいという想いと地域で水質環境の浄化活動に取り組む専門家がチームとなり、本チャレンジに取り組んだ。最終的にクラウドファンディングでの資金調達なども達成し、実際の河川に水質浄化装置を設置し地域の水質環境の改善に繋がった。

チャレンジ活動名：港を玄関口とした地域経済の再活性化
活動テーマ：クルーズ観光船が立ち寄る地域での地域観光コンテンツづくり
活動概要：小松島市は全国でも有数のクルーズ観光船が立ち寄る地域で、年間に約 10 隻・乗客にして 1 万人の観光客が訪れている。しかし、小松島市で観光したり消費したりする人はほんの一握りで、多くは徳島市や鳴門市、西部地域に移動してしまっている。こうした現状に対して、地域の魅力を再度発掘し観光コンテンツを開発し、地域経済の再活性化に取り組んだ。

チャレンジ活動名：移住・農業体験の場　ファンファーム
活動テーマ：移住のきっかけとなる農業体験民宿づくり
活動概要：近年、幅広い世代で、地方移住や農業に携わりたいという人が増加している。また、移住して農業をしてみたい方の約 8 割は無農薬、有機肥料を使用する有機栽 培や自然栽培での農業を希望している。こうした背景から、農業と空きスペースの活用というアプローチのもと、廃校グランドでのファーマーズマーケットの開催などを行った。最終的に本活動のメンバーの自宅を改装し、農業体験ができる民泊「ファンファーム」が立ち上がり、社会実装につながった。

［2019 年～2020 年に活動したチャレンジ］

チャレンジ活動名：サイクルシティコマツシマ
活動テーマ：小松島を自転車に優しい街にすることによる健康づくり＆交通改革
活動概要：商店街連盟会長や観光ボランティア協会のメンバーが中心となり、車中心の地域社会での移動手段として、住民や小松島にやってきた人に自転車での移動を身近に感じていただき、中小商店街の利点や地域の歴史などの小松島の魅力の再発見を目的としてチャレンジ活動を行った。2 年目には南小松島駅でのレンタサイクルを設置、実験を開始。レンタサイクルの利用ニーズ調査や地域商店の広告掲載によるファンドレイジングの可能性を探った。3 年目はコロナ禍で思ったような活動ができないこともあったが、自分たちで作成した自転車ルートの試走やその様子を動画にまとめて地域の魅力の情報発信などに取り組んだ。

チャレンジ活動名：Fly&Home 酒蔵ホテルづくり
活動テーマ：農業実践とコミュニティの「場」づくり
活動概要：2018 年度の農業チームから派生する形で、吉田先生が自ら農業プロジェクトのリーダーとなり、チャレンジを牽引している。小松島市で栽培された酒米で作ったお酒（６次化商品）の開発や、3×3 ラボとのコラボレーションにより、小松島市と東京をまたぎ、新たな共創の可能性を模索しながら活動を行った。３年目には農業におけるドローン技術を持つ企業を始め他分野に渡る専門家がチャレンジに参画し、農業と 6 次化実践事業を中心とした活動へと発展した。

チャレンジ活動名：横須海岸をキラキラ光る砂浜に
活動テーマ：水質・地域環境の改善と観光資源の開発
活動概要：かつて海水浴場として栄えたが今は人もまばらな海岸をフィールドに、海岸の清掃活動や賑わいづくりのワークショップの企画、アンケート調査に取り組んだ。海岸浄化の先進事例である長崎県環境保健研究センターへの視察を行い、チャレンジオーナー自らが科学技術を持ったパートナーとのネットワーキングを進めた。

チャレンジ活動名：やまももこども園プロジェクト
活動テーマ：地域ぐるみで子どもを守れる・育む教育＆子育て環境づくり
活動概要：本チャレンジは、小松島市で災害の際にも安心して子どもを守れる保育・教育機関を創り、0 歳~5 歳 までの子どもたちが共に学び合い、好奇心の芽を育てる就学前教育の実現を目的として生まれた。休日の子育て支援プログラムや親子で災害について学べる教育プログラムの開発を地域防災の専門家とともに取り組むなどの活動を行った。

なお、Fly&Home 酒蔵ホテルづくり、横須海岸をキラキラ光る砂浜に、やまももこども園プロジェクト、の３つのチャレンジに関しては、本支援事業終了後も継続して活動する意思を確認している。

波及効果①地域へのリビングラボの概念浸透

2 年目に加わった 2 つのチャレンジは、初年度の活動参加者がチャレンジオーナーをこまつしまリビングラボに誘い生まれたチャレンジであった。また、初年度より事務局・運営が企画した場だけでなく、チャレンジメンバー自ら必要な知識や研究者などを探し、視察などを通してネットワーキングを行うケースも見られており、参加者の自主性が高まった活動が活発に行われるようになった。また、各チャレンジでの活動だけでなく、参加者が地元メディアでこまつしまリビングラボについての紹介を行ったり、全体の WS 講師を務めチームをファシリテートするケースが生まれた。このように、リビングラボに参加した地域住民がリビングラボの概念を理解し、地域内でのリーダーシップを発揮するケースが見られ、市民同士による学び合いがまちづくり力の向上という波及効果が生まれた。

波及効果②地域を越えた共創活動の実践

初年度、2 年目と合宿形式で社会イノベーションを加速させるフィンランドアールト大学で確立された innovation camp methodology をベースとした連続 WS「社会共創キャンプ」を開催した。キャンプではイノベーションキャンプの提唱者であるイノベーション専門家ハンク・クーネをオランダから、市民参加型のまちづくりの専門家であるロバート・ヘイスティングスを米国オレゴン州ポートランドからゲストに招いた。同キャンプでは通訳兼ファシリテーターとして都市計画や参加型まちづくりのデザインに詳しいファシリテーターも招聘し、その後も各チャレンジ活動のファシリテーターとして地域内外を繋ぐ役割を担って頂いた。2019 年の社会共創キャンプのプレセッションとして横浜で開催したプレ・キャンプや酒蔵ホテルチャレンジが実践する東京での共創ワークショップなど、小松島市や県内だけでなく、都市部との新たな共創の可能性を模索しながら地域を越えた共創活動を行うことができた。2020 年には新型コロナウィルスの影響もありオンラインベースでの活動がメインとなったが、オンラインの利点を活かし地域内に不足しがちなマンパワーや高いスキルを持つ専門家などに対して、小松島をフィールドとして提示することでチャレンジとのマッチングが促進され、市民が主体となりながらも、地域を越えた多様なステークホルダーが参加する共創活動を実施することができた。

波及効果③こまつな研修の実施

こまつしまリビングラボに取り組む中で、担当部署だけでなく行政全体のコミットメントを如何に引き出せるかというのは、大きな課題であった。そこには、内部の人事異動などでその関係性がリセットされるなど、行政の構造的問題も存在した。そこで事務局として、行政からこまつしまリビングラボの運営に対する予算化を目指しながらも、共創活動の重要性を理解した職員育成が長期的なプラットフォームの構築につながるのではと考え、こまつしまの未来に繋がる共創型人材育成研修、通称「こまつな」を運営委員会のメンバーやファシリテーターと企画し、3 年目に実施するに至った。本研修は当初計画には盛り込まれていなかったが、行政としても変革を起こさなければならないという自覚から生まれた取り組みであると言える。

６. 外部評価

6-1. 評価委員の選出基準

①リビングラボに関するグローバルな活動を行い、アカデミックな視野や知識と共に、地域での実践的な活動への参加経験を持ち合わせた人物
②ワークスタイルやライフスタイルの変革を支援するビジネスに携わり、国内外の関連活動を熟知し、イノベーション手法に知識と経験のある人物
③徳島県内に在住して、こまつしまリビングラボの日常的活動に密度高く接することができ、かつ、地域創生やデザインの専門的知識と経験を有する人物

6-2. 評価委員

昨年度に引き続き、プロジェクトの外部評価にあたり、以下の３名の委員に評価をいただいた。

・秋山弘子 東京大学高齢社会総合研究機構特任教授（委員長）
・齋藤敦子 コクヨ株式会社 ワークスタイル研究所 主幹研究員（副委員長）
・松尾　彩 川眞田デザイン研究室（委員）

6-3. 評価委員会への依頼事項

①日本の地方における地域の持続を大きな目的に掲げ、リビングラボという新しいアプローチで取り組む本プロジェクトの客観的な目線での外部評価
②上記のために必要となるリビングラボ評価のための考え方と評価軸の作成。特に国内他地域のリビングラボとの比較や国際間比較が可能となる評価軸の作成。

6-4. 評価検討委員会の開催状況

2018 年度
・2018/12/13 オンライン
・2018/12/19 東京
・2019/3/11 東京
・2019/3/15 鎌倉
・2019/3/22 徳島

2019 年度
・2020/4/16　オンライン
・2020/4/24　オンライン

2020 年度
・2021/2/24　オンライン

6-5. 評価委員の現場への立ちあい状況

秋山委員長には、初年度の立ち上げ期におけるキックオフ会にご参加頂いた。齋藤委員には、初年度より継続してファシリテーターとして全体イベント、ワークショップ、チャレンジ活動に継続的にご参加いただいた。松尾委員には、全体イベント、ワークショップ、チャレンジ活動のサポートに加えて、ワークショップツールやコンセプトブックの制作にも携わっていただいた。

6-6. 評価のための参考資料の作成

評価を頂くにあたって、事務局としてこれまでの活動をまとめた資料を作成し、活動報告を行った。

6-7. 最終年度の活動評価

評価委員会にて、３年間の活動に対して、下記のご評価・ご助言を頂いた。

・日本のリビングラボはまだ萌芽期にあり、３年間を通じたうまくいったことだけでなく、うまくいかなかった課題についてもきちんと整理し、発信することが重要である。

・手探りの活動の中で、３年間を通じて前年度の繰り返しにならず、スパイラルアップで活動を行ったことは評価できる。

・リビングラボの重要な KPI でもある、リビングラボを通じて参加者がどのように変化したのかについて、今後も継続した調査を行っていただきたい。

・今後の発展について、行政は人材育成、大学はスケールを広げて教育に繋げるとあるが、市民の具体的な動きが見えない。ボトムアップ型のリビングラボとして、国内でも稀有な事例であると考えるため、今後も大学を中心に市民をサポートし、活動の継続、発展に繋げていただきたい。

・当初対話することに不慣れだった市民が、リビングラボの活動を通じて多様な人達と対話する力が身についたのではないかと感じており、これは市民の大きな変化、成長があったと評価している。

・当初想定していたが巻き込みがうまくいかなかったステークホルダーに関しては、その原因を深堀りし、整理しておくことが重要ではないだろうか。

・本事業はノベーションの拠点を創るというのが主目的であり、異なるステークホルダーの共同体制を創ることが重要である。そのためには地域のビジョンを可視化し、参加者全体で共有する必要性があったのではないだろうか。

・リビングラボは現在様々な地域での広がりも見せているため、先行事例として、上手くいかなかった苦労なども含めて、報告書の作成や情報共有を行ってもらいたい。

7. 支援終了後の活動（継続・発展）など

2-2. 長期目標の達成状況でも述べたが、本事業の支援終了後の活動について、改めて記す。現時点では、企画立案時に想定していた政策形成や行政による担当部署の設立、具体的な予算化には３年目の時点では至らなかった。しかし、それぞれがこれまでの活動で得たネットワークを活かしながら、当面は自主予算の範囲でこまつしまリビングラボの活動を継続していく。

まず、事務局として全体ディレクションを担ってきた徳島大学の人と地域共創センターでは、これまで実践してきた共創の手法を教育の中に取り入れる。具体的には、徳島大学が文科省より受託した大学教育再生戦略推進費「大学による地方創生人材教育プログラム構築事業」の中で進める地域の課題解決を目的とした地域共創型インターンシップ（仮）の開発に取り組む。また、これまで蓄積した共創活動のメソッドを用いながら、他地域や広域連携での共創活動、リビングラボを展開する予定である。小松島市役所では、3 年目に実施した共創型人材育成研修を次年度以降も継続する予定である。現在は市役所職員、地域の企業や団体の社員や職員、大学生が参加しているが、今後地域の市民やこの３年間で生まれたチャレンジとの連携などの発展可能性がある。最後に、こまつしまリビングラボが掲げた市民が主役の共創活動を掲げてきた。その中で市民が中心になり現在も活動を続けるチャレンジについても、当面は徳島大学人と地域共創センターが支援しながら、地方発のイノベーション創出を目指し、自立に向けての共創活動を行う。